

英国奴隷貿易廃止の物語（その2）

児島秀樹

要旨

奴隷貿易廃止に向けた運動の大きな転換点として、1780年代の重要性を確認する。

1770年代までの法廷闘争の時代は終わり、ゾング号事件をきっかけにして、法制度の変革の時代が始まった。まずは奴隷貿易の廃止に向けた立法闘争が始まった。

18世紀以前と異なり、奴隷貿易廃止のための法律の制定は言論を背景に行われるようにもなった。リヴァプール船籍のゾング号は132人の奴隷を海に放り投げることで、海損に対して保険金を得ようとした。ゾング号事件にかかわった奴隷商、保険業者、裁判官にとっては、民事事件にすぎなかった。しかし、奴隷の命を奪うものとして、刑事事件として告発する人たちがいた。この告発自体は失敗したが、英国の民衆が奴隷制を考える大きなきっかけとなった。

〔キーワード〕 大西洋奴隷貿易廃止、オラウダ・エクイアノ、ゾング号事件、トマス・クラークソン

1. はじめに

前稿（「英国奴隷貿易廃止の物語」、本『紀要』38-2、2007年）では、1770年代までの大西洋奴隷貿易の物語をとりあげ、廃止派の主要な人物としてはグランヴィル・シャープの略歴を見た。本稿はそれを受けて、廃止運動が本格化する1780年代に焦点をあてる。ただし、1787年に設立されたロンドン奴隷貿易廃止協会に関するものは、別稿を参考にしてほしい。¹⁾

シャープが1765年にストロングという名の黒人奴隷を介抱して、人道的法廷闘争を始めてか

ら、廃止運動が本格化するのに20年ほどかかった。そして、その運動が実を結ぶのに、さらに20年の年月が流れ、1807年に大西洋奴隷貿易は法的に廃止される。シャープの法廷闘争開始から、イギリス領カリブ海植民地での奴隷制の廃止が決まった1833年までの約70年間のうちで、1780年代は廃止の「希望」が「現実」に変わる可能性がでてきた転換点として、大きな意義を有する。しかし、その「現実」は1789年のフランス革命の勃発で始まった90年代の挫折を乗り越えなければならなかった。

1780年代に、イギリスを取り巻く情勢が大きく変化した。1776年に独立を宣言したアメリカがイギリスとの戦争＝内乱に勝利した。1783年のパリ条約でイギリスは北アメリカ植民地の独

1) 児島秀樹「イギリス奴隷貿易の廃止と宗派」『明星大学経済学研究紀要』34-2、2003年。

立を承認した。1787年、アメリカ合衆国憲法が起草され、これに基づいて、1789年に連邦政府が成立し、合衆国の初代大統領としてワシントン（在位1789-97）が選ばれた。

政治史と並行するかのようには、経済史も大きな変化の時期を迎えた。1760年代から徐々に始まっていたイギリスの産業革命は1780年代には本格化するようになった。英国が1833年に奴隷制廃止法を制定した頃には、産業革命もほぼ終盤を迎えていた。

前稿で取り上げた、1772年のサマセット事件の評価は難しい。シャープの法廷闘争は勝利したと言うことはできる。マンズフィールド卿の判断では、英国には奴隷はいない。奴隷のサマセットはイギリス国内では自由であるとは判断されなかったが、彼の同意がなければ、植民地に送り返されることはないとは判断することで、その判断は、事実上、イギリス国内では奴隷の解放を認めたと誤解される判決となった。

1775年に北アメリカ植民地でペンシルヴェニア廃止協会が設立されたり、1776年には、クエイカー教徒が英米の信者に奴隷解放を求めたりするなど、アメリカ独立戦争時代までに、廃止運動は大西洋の東西に深く根づいた。しかし、まだ、多くの国民を巻き込む運動にはなっていなかった。

1780年代に奴隷貿易廃止運動は大きな転換期を迎える。廃止運動はゾング号事件で本格化したと言ってもいいかもしれない。現代ならテレビのワイドショー番組で話題になるような形で、大衆の耳にも届くほどに、大きな話題性をもった事件がゾング号事件であった。1781年の晩秋、リヴァプール船籍のゾング号から多数の奴隷が生きたまま、海に投げ込まれた。法律上は奴隷は財産（動産）であり、馬と同じと思われていた時代なので、奴隷を海に投げ込むこと自体には、あまり関心がなかった。法廷闘争の

当事者は奴隷も人間であることに無関心であった。奴隷は財産であるので、それを投棄した場合に、保険契約（insurance policy）における海損として、保険金を支払うべきかどうか、争点となった。最初は、単なる民事事件で終わるはずだった。

このゾング号事件を民事の領域ではなく、刑事の領域の問題であるとして、大衆にその重要性を知らせたのは、エクイアノとシャープであった。特定の行為が犯罪であるかどうかを判定する基準が時代によって、変化する。それまで全く問題がなかった民事的行為が犯罪であると非難されるようになった。非難された側からすると、とんでもない誹謗中傷を受けたことになるであろう。彼らは、奴隷を自分と同格の人間と見なすことを要求されると、要求された時点で被害者意識を持ってしまう。それほどに、彼らは通常、自分と思想信条が異なる者に対して、日常的に誹謗・中傷・蔑視を繰り返しているものである。自分たちのように優れた人間がなぜ劣等な人間から犯罪者扱いをされなければならないのか。それが彼らには理解できない。

1780年代に奴隷を通して、「人間」の意味が変化した。奴隷は「法的」にも、動産である前に、人間であると理解されるようになった。もちろん、法意識が固まるためには、数十年、時には、数世紀の時間を要することも多い。ゾング号事件は人間であれば、誰にでも通じる法があるという人権思想に大きな影響を与えた。あるいは、古代ローマの法体系の発想でいえば、ローマ市民の法では奴隷は奴隷であったが、売買や債権債務関係のように、市民をこえて適用すべき万民法（国際法）、あるいは人類に共通する法としての自然法の中では、奴隷も人間であった。『論語』のように、「己の欲せざる所は人に施すなかれ」という発想法が万民法・自然法には要求される。

現代でも人権思想は国際法の領域で問題にされることが多い。⁽²⁾しかし、法意識を支える一般人の発想法を言葉にすれば、次のような発想法が考えられる。近代の人権思想には、すべての人間はあなたと同じ扱いを受ける権利をもつ、といった普遍的な個人主義的発想が根底にある。この点をゾング号事件になぞらえていえば、あなたを船から投げ捨て、サメのえじきにすることを、あなたが当然であると考えたら、そうすればいいが、それは許されないと考えるなら、あなたに生きる権利があるように、奴隷にも生きる権利があると考えなければならぬ。人間は平等である。

奴隷貿易廃止運動は平等を主張したものではない。しかし、人間には格があると考えて、他人にたかる権利を維持・確保するために、自己の行為を正当化する人がいれば、その人を同じように処理していいと考えたかもしれない。「同害応報」は許されないかもしれないが、害は害であり、犯罪は犯罪である。どのような理由、どのような道徳規範、どのような法的根拠があろうと、奴隷を海に投げ捨てて殺すことは殺人である。

2. 解放奴隷の自己主張:エクイアノ

18世紀の後半には、元奴隷であった黒人の中に、小冊子を出版して、奴隷解放を求める戦いに身を投じる者も出てきた。中でも有名な黒人がオラウダ・エクイアノ（Olaudah Equiano: 1745～1797-04-30）である。エクイアノの生涯に関しては、1757年以降は、資料的にも確認されるが、それ以前は、エクイアノの創作かもしれないという説もある。1747年頃にエクイアノはアフリカではなく、実際には、北アメリカの

サウス・カロライナで生まれた、と。

エクイアノ自身の証言では、彼は現ナイジェリア東南部の、ベニン王国のイボ人の村で生まれた。11歳の頃、1756年に妹たちと一緒に遊んでいた時、アフリカ人に誘拐され、西インド諸島のバルバドスに売られた。数日後、西インド諸島から、北アメリカ植民地のヴァージニアに連れていかれ、プランターに売られた。そのひと月ほどのちに、イギリス海軍士官であったパスカル（Michael Henry Pascal）に再販売された。パスカルは彼をヴァッサ（Gustavus Vassa）と名付けた。7年戦争（1757-1763）中にエクイアノはパスカルとともに戦争に出た。パスカルは奴隷解放の約束を実行しないで、1762年の年末に、西インド諸島のプランターにエクイアノを売り飛ばした。

西インド諸島で、多くの奴隷はサトウキビ栽培に従事していた。しかし、エクイアノはその才能を買われて、所有者のために商売に従事した。そこでためた小銭を元手に、1766年7月11日、エクイアノは自由を買い取った。確かに、法的には奴隷解放であったのかもしれないが、20歳前後での解放という、その年齢からすると、もしかしたら、この解放は年季契約奉公人が奉公期間をおえて、独立したという意識に近かったかもしれない。奴隷制廃止運動とそのあとを受けた19世紀の社会思想の影響で、歴史研究者でさえ、奴隷の話になると、徹底的に人間性を無視された扱いを連想しがちであるが、社会により、時代により、その扱いは異なる。イギリスでは18世紀まで、若者の6割程度は人生が奉公で始まったと言われる。主人による鞭打ちさえ行われ、逃亡する若者も多かった奉公制度を、もう少し、厳しいものにしたのが、イギリスの近代奴隷制の性格かもしれない。法廷闘争が必要なほど過酷な扱いを受けた奴隷もいれば、他方で、労働環境や所有者の良心に守ら

2) 大沼保昭『人権、国家、文明：普遍主義的人権観から文際的人権観へ』筑摩書房、1998年。

れて、人間としてしっかり成長できた奴隷もいた。

エクイアノは奴隷解放された後、1年間は、以前の主人であったロバート・キング (Robert King) というクエイカー教徒の下で働いた。そこで、彼はジョージアやペンシルヴァニアへ何度か商売に出かけた。エクイアノは奴隷の間に身に付けた航海術や語学力をいかして、1767年から73年まで、ロンドンを拠点として、北米、地中海、西インド諸島、北極などに出向き、交易・探検に従事した。1775～76年には、以前の雇用者のチャールズ・アーヴィング (Dr Charles Irving) を助けて、黒人奴隷の購入や監督にあたったこともあった。アーヴィングは中米にプランテーションを作ろうとしていた。

1774年10月6日、エクイアノはメソディズムに改宗した。クエイカーと国教会・福音派の他に、メソディストも奴隷貿易に反対した人が多い。メソディズムはウェスリー (John Wesley: 1703-06-17～1791-03-02) が創始し、産業革命時代の労働者や貧民に急速に広まった宗派である。ウェスリーは1735～37年にジョージア州で伝道したことがあり、奴隷制を直に目撃した。この植民地は、シャープとエクイアノをひきあわせたオウグルソープ将軍が1732年から植民活動に乗り出した土地であった。ウェスリーはアメリカ独立戦争が始まる前に、奴隷制を批判した。

アメリカのクエイカー教徒が書いた本で、もっとも英国に影響力があつたのは、アンソニー・ベネゼットの『ギニア史記』(1771)である。³⁾ この本はのちに、クラークソンの人生をかえたほどの影響を与えた。後述するクラークソンの懸賞論文はこの本の影響で書かれたものである。ウェスリーも1772年にベネゼットの本を読み、それに感銘をうけた。ウェスリーは、

1774年、『奴隷貿易考』(Thoughts on the Slave Trade) で奴隷貿易反対を表明した。⁴⁾

ウェスリーの死後、彼の下に集まった者たちは、国教会から分離して、メソディスト監督教会を結成した。メソディストは神学的にはアルミニウス主義に近づいて、人間の自由意志を強調し、カルヴィニズムへの反対を徐々に明確にした。奴隷貿易反対派にはケンブリッジ大学の卒業生が多かったが、ウェスリーはオックスフォード大学出身で、在学中に聖書に記載された方法 (method) に従って生きる道を探した。

エクイアノは1780年代にその意思に反して、自由を得た黒人によるシエラ・レオネ植民に参加したこともあったが、植民活動の腐敗を明らかにしてしまった。エクイアノはこの経験を生かして、「アフリカの息子」(Sons of Africa) を結成した。この組織はイギリス在住の黒人たちの声を社会に知らせた。「アフリカの息子」は当時イギリスに在住していた12人の黒人によって、1787年、ロンドンで設立された。奴隷貿易と奴隷制の廃止は道徳的な罪意識、あるいは、キリスト教的原罪 (sin) 意識がその原動力にあつたとしたら、この「アフリカの息子」は奴隷として扱われた実体験をもとにして、黒人も市民権が与えられること、平等な人格として認められることを求めた。シャープはエクイアノたちの活動を認めた。しかし、黒人自身によるこの活動を、廃止運動に参加した白人が心から認めたかどうかという点になると、評価は

3) Anthony Benezet, "Some Historical Account of Guinea: its situation, produce, and the general disposition of its inhabitants with an inquiry into the rise and progress of the slave trade its nature, and lamentable effects", Frank Cass, (1968; 1st ed., 1771).

4) James Walvin, "England, Slaves and Freedom, 1776-1838", Macmillan Press, (1986), p. 103.

分かれる。

エクイアノは1789年3月に、『興味に富む実話』を出版して、奴隷制に反対した。⁵⁾ 英国のフェミニズム運動の創始者であるウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) たちもこの本を賞賛した。

3. 人権と商業活動：ゾング号事件

エクイアノは1783年3月18日に『ロンドン朝刊新聞』(the Morning Chronicle and London Advertiser) に載せられた記事を読んで、ゾング号事件をグルランヴィル・シャープに伝えた。130人ほどの黒人が生きのまま海に捨てられたと。シャープはこの事件を大きくとりあげた。当初は保険業者と商人たちの間での、保険契約に関する民事の事件にすぎなかったが、奴隷貿易反対派の活動によって犯罪（殺人事件）として脚光を浴びるようになった。

シャープは法廷闘争に臨んだが、海軍法廷で船長たちを殺人罪で問うことには失敗した。しかし、ラムジ師やベネゼットの小冊子の出版もあり、ゾング号事件は奴隷貿易廃止運動を盛り上げるきっかけとなった。⁶⁾

コリングウッド (Luke Collingwood) を船長とするゾング号 (the Zong)、107トン、西アフリカで奴隷を積み込んだ。奴隷の多くは、アフリカ交易商人会社 (Company of Merchants Trading to Africa) がアナマボ (Anamabo) に建てていたウィリアム要塞で購入したものである。9人の商人がこの会社を経

営していた。会社といっても、制規会社であり、一種の公益事業体である。経営陣として、ロンドン、ブリストル、リヴァプールからそれぞれ3人の代表が選ばれた。1672年に設立された王立アフリカ会社時代には、ロンドンの商人が独占的にアフリカとの交易権を握っていた。少しずつそれが開放されて、最終的に1750年に、この会社にとってかわられた。アフリカ交易商人会社は王立アフリカ会社の解体後、その資産を受け継いで、アフリカ交易を維持するために設立された会社である。ウィリアム要塞は1753年に議会の援助を受けて、会社が建設した。⁷⁾

ゾング号は奴隷を積み込んだあと、1781年9月6日、サントメ島からジャマイカに向けて出航した。船長の月収は約5ポンドであったが、積荷の奴隷には1人30ポンドの保険がかけられた。この保険金額はほぼ奴隷購入費を償える価格であった。

積み荷は470人ほどの奴隷であった。結果として132人の奴隷が海に投げ捨てられた。商品としての奴隷に対する海上保険は海上の危険で奴隷が死ねば支払われる。水の不足は天候の責任であって、船長の責任ではない。水が不足すれば、多くの奴隷が死ぬ。その危険を回避するための投げ荷 (jettison) は、海上保険では海損 (average) として、保険で償われる。船長が荷を投げる権限をもつ。コリングウッド船長は病気で弱った奴隷を捨てて、まだ元気な奴隷を助けた。

ゾング号は1781年11月27日、西インド諸島の

5) Oludah Equiano (Vincent Carretta ed. and note), *"The Interesting Narrative and Other Writings"*, Penguin Books, (2003).

6) Elizabeth Donnan (ed.), *"Documents Illustrative of the History of the Slave Trade to America"*, vol. II, W.S. Hein, (2002; 1st ed., 1931), p.liv. この本の pp.555-557に、ゾング号事件の一つの資料が載せられている。

7) Ian Baucom, *"Specters of the Atlantic: finance capital, slavery, and the philosophy of history"*, Duke Univ. P., (2005), pp.10, 50. この本は思想家には面白いかもしれないが、歴史家にとっては冗長である。しかし、示唆には富んでいる。

英国領ジャマイカに到着した。しかし、そこはジャマイカではなく、スペイン領のヒスパニオラ島であったので、さらに2日かけて、英国領のリーワード諸島に出向くことになった。11月29日までに、中間航路（三角貿易の中間の、アフリカからアメリカまでの航路）で60人以上の奴隷と7人の白人船員が死亡していた。アフリカを出航したときには、白人の船員は17人であった。

黒人奴隷に劣らず、白人も多数、中間航路で死んでいたのは、奴隷貿易史では常識の一つである。その理由として、アフリカの疫病、良質の水の不足、栄養不良、反乱・喧嘩、事故・悪天候など、さまざまなものが推測される。相続者への死亡船員の賃金支払いが裁判になることもあるが、ゾング号事件では争われていないようである。17世紀までなら、分配方式（海賊の「分け前」に似た形式）も考えられるが、18世紀は大半が一定額の賃金となっているはずであるので、その金額プラス α が遺族に支払われたものと推量される。

ゾング号がカリブ海に到着したとき、生き残っていた奴隷の多数は病気で死にかけていた。奴隷が死んでしまったら、それは奴隷所有者である船主たちの損失となる。船長は一計を案じた。体調を崩した奴隷が多くなると、市場に連れていっても、高値で売れない。無料でも買い手がつかない可能性さえある。そのような状態で、奴隷を安くたたき売るより、保険で償ったほうが利益になる。他の奴隷を守るために、一部の奴隷を海に捨てて損をするのは、自分たちではない。

裁判では、水不足で奴隷が死にかけたと船長は主張した。しかし、実際には、水不足で奴隷が捨てられたのではないのが、裁判の過程で徐々に明らかになった。11月29日に、船長は200ガロンほどしか水が残っていないのに気づ

いた（1ガロン＝8ポイント。1ポイントで大ジョッキに軽く1杯ほど）。その日の夕方、船長は船員たちとの話し合いの席で、100人以上の黒人が病気や衰弱で死にかけているので、彼らを海に投げ込むことを提案した。保険契約には投げ荷の条項がある。それによると、一部の積み荷を捨てることで、残りの積み荷を守らざるをえない事態に陥ったとき、船長の責任で荷を捨てた場合には、保険会社はその損失を補填する。コリングウッド船長はこの条項を自分なりに解釈して、病気で自然死すると、船の所有者の損失になると、生きたまま海に捨てると保険業者の損失となると主張して、奴隷を捨てることを船員に提案した。病気の奴隷は捨てたほうがいい。

船員からは反対論も出た。それを押しきり、コリングウッド船長は132人の奴隷を海に捨てることになる。11月29日の話し合いの後、病気がちの54人が生きたまま海に捨てられた。

12月1日には、さらに42人が海に投げ込まれた。この日に雨が降り、6樽に水をためることができた。これで水は少なくとも11日はもつことになった。

しかし、12月9日には26人の奴隷が手足を縛られて、海に投げ込まれた。この光景を見ていた黒人のうち、10人が船員をふりほどいて、海に飛び込み、おそらく溺死した。ゾング号は2週間のちの12月22日に、ようやくジャマイカに到着した。

1781年11月29日までにすでに死んでいた60人以上の奴隷と、生きながら捨てられた132人の奴隷をあわせると、アフリカからアメリカへの、いわゆる中間航路で死んだ奴隷は、200人ほどになる。西アフリカで積み込まれた奴隷の半数近くに達した。

西インド諸島に上陸できた奴隷は、おそらく、通常的方式で販売されたものと思われる。

奴隷船の投資家（資本家）＝船主が信頼する西インド諸島の販売代理人がすべてを引き受ける。その代金は3～6カ月の短期の手形で送付されることもあった。しかし、多くは支払いまで1～3年の猶予のある長期の為替手形で販売収益が送付（remit）された。販売収益の一部は、代理人の手数料（commission）として認められた。為替手形は利子付きであった。形式的に言えば、為替手形という形で代理人は投資家（船主）に対して借金をしたことになる。為替手形は奴隷代金が手に入るのを待つまでもなく、リヴァプールの奴隷商に宛てて振り出された。

リヴァプールの船主であるグREGSONたちが保険金を支払うように提訴したのは、ギルドホール（Guildhall）の裁判所であった。このグREGSON対ギルバート（Gregson v. Gilbert）の訴訟で、所有者のジェームズ・グREGSONたちが勝訴し、保険業者は保険契約に従って、奴隷1人あたり30ポンドを支払うこととなった。

保険業者は王座裁判所（Court of King's Bench）に控訴した。保険業者の法廷弁護士（barrister）たちは「1人の命はその肌の色にかかわらず、他の人の命と同じである」と論じた。現代でも同様の手法がよく利用されるが、彼らはおそらく本気でそう思っているのではなく、判決を有利に導くために、人権を認めるような主張をしたものと推察できる。それに対して、グREGSONたちのために、首席事務弁護士（Solicitor General）のジョン・リー（John Lee）は「これは財と動産の裁判である」と主張し、「善悪は何ら関係しない」と論じた。マンスフィールド卿は事件を差し戻した。彼によると、たとえ衝撃的事件であったとしても、「奴隷の事件は馬が海に投げ込まれる場合と同じ」であると理解される。⁸⁾ 要するに、民事事件であるには違いないが、海損にはあたらない

ので、保険金は支払わない方向で検討しなさい、と。

シャープはこの知らせを聞いて、海軍関係者、主教、大臣、ポートランド公爵などに事件を伝え、その支持を求めた。船員は殺人者であるので、彼らに刑事罰を与えるように求めた。国民は憤慨したが、政府は動かなかった。1791年、議会は保険業者に、奴隷が海に投げ出された時には、奴隷船の所有者に保険金を支払うのを禁じた。ゾング号に関しては、黒人奴隷の投げ荷はお咎めなし。事件から10年たった、この法律でも、投げ荷を刑事事件にしたのではない。単に、保険金の支払いにあたらぬとするだけで、保険金目当てで投げ荷されるのを防ぐ効果をねらった。

リヴァプールは当時、イギリスで最大の奴隷貿易港になっていた。1781年にゾング号に投資したのは、ウィルソン（Edward Wilson）、アスピナル（James Aspinall）、グREGSON一家（William Gregson, James Gregson, John Gregson）であった。奴隷商であるグREGSONたちも海上保険に乗り出していて、自ら保険業者にもなっていた。ゾング号事件では、保険業者としても、彼らの同業者であり、リヴァプールの商人であるギルバート（Thomas Gilbert）たちが選ばれた。ギルバートの保険契約では、ゾング号という船体に2,500ポンド、奴隷は各人30ポンドで計算して、440人では

8) Steven M Wise, "Though the Heavens May Fall: The Landmark Trial That Led to the End of Slavery", Century, (2005), pp.205-207. なお、James A. Rawley with Stephen D. Behrendt, "The Transatlantic Slave Trade: A History", revised edition, University of Nebraska Press, (2005; 1st ed., 1981), pp.256-257はゾング号の奴隷は442人であったと指摘したり、2番目の裁判の証拠は見つからなかったと注45で指摘したりしている。

13,200ポンドの保険がかけられた。⁹⁾

ウィリアム・グREGGソンは当時、リヴァプールで最大級の奴隷商人であった。彼は1744年に書かれた奴隷貿易の資料を初出として、それ以降の経歴を追うことができる。グREGGソン家はそれ以前はロープの製造業者であった。ウィリアムがカロライナ号に投資した1744年頃には、リヴァプールには約30隻の奴隷船があった。1750年代に多くの利益をあげて、昔からのリヴァプールの名士であったケース家と姻戚関係も確立した。トマス・ケース (Thomas Case) はジャマイカにプランテーションをもち、キングストンに奴隷販売のプロカーを配置していた。その息子ジョージはグREGGソンの娘と結婚した。ウィリアム・グREGGソンは1762年にリヴァプール市長となった。リヴァプールの市長は慣例として、任期1年であった。義理の息子のジョージ・ケースも1782年に市長になった。息子のジョン・グREGGソンは1784年に市長になった。

ジョンは1784年にリヴァプールで初めて仮面舞踏会を、市長という立場で開催したし、貧民の子のための日曜学校の設立にも貢献した。ゾング号事件当時、リヴァプールの投資家たちはリヴァプールでもっとも有力な家系を誇っていたと評することができるかもしれない。¹⁰⁾

4. 良識は攻撃される：ジェームズ・ラムジ

ジェームズ・ラムジ (James Ramsay : 1733-07-25~1789-07-20) はゾング号事件の判決のあった翌年、1784年に『英国領砂糖植民地におけるアフリカ人奴隷の処遇と改宗について』(An Essay on the Treatment and Conversion

of African Slaves in the British Sugar Colonies) という題の小冊子を出版した。この冊子は体制派の逆鱗にふれた。ラムジを攻撃する小冊子が次々に出版された。

ラムジ師はスコットランド出身である。彼は、1757年、海軍に入り、ミドルトン船長のアランデル (Arundel) 号に乗船した。1759年11月20日には、病気が蔓延した奴隷船 (ブリストルの Swift 号) の助力を頼まれた。この時の経験がきっかけとなって、のちに、奴隷制廃止運動に傾倒することになる。

のちに、聖職 (国教会) の道に入り、ロンドン主教の推薦で、ラムジは西インドに向かった。ラムジ師はセント・キッツで複数の教会を任された。彼は聖職に従事しながら、医療活動も実施し、いくつかのプランテーションでニグロの改宗事業を始めた。所有者は激しく抵抗した。冊子や新聞がラムジ師を非難・攻撃した。

1777年、ラムジ師はイギリスに戻った。1778年には、西インド小艦隊を指揮していたバリントン提督の下で従軍牧師の地位 (chaplaincy) を得たが、81年に奴隷のネスタとともに、英国に戻り、ケント州に居を定めた。

ラムジ師は隣人の勧めで、1784年、前述の小冊子を出版したが、これはゾング号事件をきっかけに書かれたものではなく、数年かけて作成されたものであった。この冊子で、ラムジ師は自由な労働の利点を力説し、ニグロの劣等性を否定して、奴隷制廃止を求めた。そのため、数年間、彼は個人攻撃を含めて、さまざまな非難にさらされた。この論争で奴隷貿易廃止運動が始まり、ラムジ師は首相にも招かれて、自説を開陳するほどになった。

ラムジ師は1789年7月20日、胃の大量出血により、55歳で死亡した。その数日前、ラムジ師はクラークソンに手紙を認めた。「思うに、無駄に生きたのではなく、私たちの性格の改善に

9) Baucom, *op.cit.*, pp.10-11.

10) *Ibid.*, pp.48-49, 75-77.

何ごとかをなせたことに満足して、この事業は全体的に、私がこの場からちょっと暇乞いをしてもいい状況にあると思います」。(11)

セント・キッツ在住の法律家スティーヴン（James Stephen）によると、下院議員のクリスプ・マリニュー（Crisp Molyneux）はセント・キッツにいた息子に宛てた手紙で、「ラムジは死んだ。私が殺した」と勝利宣言をした。マリニューは廃止論争の中で、ラムジ師が聖職者の職務を怠けたとか、彼の保護下にいた病気の奴隷をほったらかしにしていたなどの、個人攻撃を繰り返していた。(12) このような個人攻撃は、誰もがそうしているものであると思われるはずの物語として、説得力がある。たとえば、1度や2度は、もしかしたら、ラムジ師も実際に、聖職を怠けて、隣人の悩みごとを聞いたりしたこともあるであろう。その原因・状況を不問にして、ただ怠けたと主張すれば、それで世間は通るし、万が一、通らないと怒り出すのが、この手の性格の人間の特徴である。(13)

ちなみに、ジェームズ・スティーヴンも廃止派のために証言した人物の一人である。彼は1783年、25歳で弁護士としてバルバドスにやってきた。到着した当日、白人の医師を殺した黒人奴隷4人の裁判が行われることを知った。実際には、黒人は関与していなくて、別の白人が真犯人であると多くの人は思っていた。しかし、裁判の結果、黒人は生きながら火刑に処せられた。西欧では中世に異端者の処刑に火あぶりの刑が実施されていたが、18世紀には火刑は実施されなくなっていた。

5. 奴隷貿易廃止の熱情：トマス・クラークソン

グランヴィル・シャープは暖簾に腕押し of 活動に従事していた。クエイカーであれ、メソヂイストであれ、福音派であれ、どの宗派の有力者もたいてい奴隷を所有していた。福音派の有力な聖職者であるジョージ・ウィットフィールド（George Whitefield）も50人以上の奴隷を所有していた。彼は「暑い国ではニグロなしに耕作はできない」と固く信じていた。(14) 現代でも、ブラジル、西インド諸島、アメリカ南部の奴隷制を考察するときに、疑似科学的見地からそのように信じている人は多い。シャープはそのような人々に手当たり次第、ゾング号に関する手紙を送った。情報は駆け巡った。

何らかの形で、ゾング号事件を知ることにな

13) この手法は現代でも家庭内暴力の常套手段であるが、裁判所、マスコミ、インターネット上でも、しばしば繰り返されている。ラムジ師に向けられた非難はふつう、自分が日常的に行っていることを、相手が行っていることであると物語る、あの典型的な、たかり正当化論の一つにすぎない。マリニューのようなタイプの人間は自分のことしか理解できない。さまざまな動機や思想で動いている人が世の中には大勢いることを、彼らは認めないどころか、自分の悪さを相手の悪さに言葉上転嫁する才能にたけている。相手が語る真実は物語にすぎないと一笑すると同時に、相手に誹謗中傷されたとわめく。その逆に、自分が語る物語は真実であると騒ぎ立て、それを認めない人間にうるさく付きまとう。彼らは生まれながらに良心がなく、思い通りにならないと被害者意識をもってしまう。言葉のゲームで、サディスティックに攻撃するのを楽しみ、それに勝利することで、彼らは幸福感にひたれる。そして、彼らは常に徒党を組み、集団で行動するため、良心的な個人主義者はその餌食になりやすい。最近では、この攻撃的なタイプの思想家を「共同体主義者」と表現している論客をしばしば見かける。

14) Hochschild, *op.cit.*, p.87.

11) Adam Hochschild, *"Bury the Chansins : The British Struggle to Abolish Slavery"*, Macmillan, (2006), p.162.

12) *Ibid.*, pp.60-61, p.162.

った有力者の一人に国教会の聖職者であるピーター・ペカード博士 (Dr. Peter Peckard) がいた。彼は1784年の説教で奴隷貿易を野蛮で残忍な貿易であると非難した。その後、ペカードはケンブリッジ大学の副学長になり、その権限で、1785年に「anne liceat invitos in servitute dare?」(その意思に反して人を奴隷にする権利があるか) という題で、ケンブリッジ大学でもっとも権威あるラテン語の懸賞論文を募った。この懸賞論文に応募し、賞を獲得したのが、クラークソンである。

トマス・クラークソン (Thomas Clarkson: 1760-03-28~1846-09-26) はジョン・クラークソン師 (Rev. John Clarkson) の子として生まれた。父は1749~66年にウィズビッチ (Wisbech) のグラマー・スクールの校長を勤めた人物であった。トマスはゾング号事件が公表された1783年に、ケンブリッジ大学 (St. John's College) を卒業した。上記のラテン語エッセーの懸賞論文が彼の生涯を決めた。¹⁵⁾

彼は賞金を利用して、この論文を出版しようとしたが、最初に出向いた出版社ではいい返事をもらえなかった。しかし、そこでウィズビッチ出身のハンコック (Joseph Hancock) という人物に出会った。彼はクラークソン家の昔ながらの友人であり、クエイカー教徒であった。その紹介で、クラークソンはジェームズ・フィリップ (James Phillip) というロンバード街の本屋と知り合った。ロンバード街は19世紀に英国の資本が世界を駆け巡った通りとして、金融史上では、20世紀のニューヨークのウォール街と同様に有名である。そこで彼は、奴隷制度に反対していたクエイカー教徒のディルウィンやウッズ、そして、形式上は国教徒であるラム

ジ師やグランヴィル・シャープらに出会い、のちにウィルバーフォースとも知り合いとなった。

1787年5月22日、シャープを議長として、クラークソンを有力な会員とする奴隷貿易廃止委員会が設立された。設立は9人のクエイカーが中心になり、クラークソンやシャープたちが加わり、合計12人が創設者となった。

クラークソンは奴隷貿易に関する情報を収集し、奴隷貿易反対集会を開催するため、ブリストルやリヴァプール等に出向いた。彼は身長が6フィート (約183cm) をこえる長身で、その威圧感のある体で各地を闊歩した。当時のイギリス男性の平均身長は5フィート6インチ (約168cm) であり、ウィルバーフォースは5フィート4インチ (約163cm) であった。¹⁶⁾

クラークソンは各地で船員から直に話を聞いたり、奴隷用品を集めたりした。奴隷用品には、奴隷を鎖でつなぐ道具や鞭だけでなく、断食する奴隷の口をこじ開けて、食べ物を流し込む道具なども含まれていた。これらの調査は奴隷商を初めとして、奴隷制度で利益を得ている人々の反感を買い、さまざまな妨害がなされた。もちろん、死の危険に直面したこともあった。既得権にしがみついた人たちの強欲に対抗して、歴史を大きく塗り替えるときには、それなりの覚悟を必要とする。クラークソンは奴隷制賛成派による言葉の暴力はもとより、日々向けられる肉体的・精神的・社会的暴力を恐れない人物であった。

この活動で集めた情報は『奴隷貿易のまとめと廃止の結果予想』(Summary View of the Slave Trade, and the Probable Consequences of Its Abolition, 1787) として出版した。

ウィルバーフォースが奴隷貿易廃止のために

15) この英文の翻訳とクラークソンの主著は The Project Gutenberg (http://www.gutenberg.org/wiki/Main_Page) で公開されている。

16) Hochschild, *op.cit.*, p.113.

議会活動を始めた1789年にクラークソンはフランスに渡った。クラークソンは8月から半年近く、革命中のパリに滞在した。クラークソンはミラボーに書簡を認めて、自由・平等、博愛という革命の理想は奴隷にも適用されなければ、何の意味もないと訴えた。あまり成功しなかったが、ラ・ファイエット侯爵やミラボー達から、奴隷貿易廃止運動に支持を与えてくれるという約束ももらった。フランスからの帰国後は、情報提供者を探し求めて、各地の海軍の船を尋ね歩いた。

クラークソンは議会の委員会に証拠を提出するため、各地を飛び回った。1794年7月、クラークソンは体調を崩した上、資金が枯渇したので、9年間、休養をとった。彼が活動を休止している期間、廃止運動は衰退したと言えるほどに、クラークソンの影響は大きかった。ロマン派のコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) はクラークソンを「道徳の蒸気機関」とよんだ。奴隷貿易の廃止に向けて、クラークソンを衝き動かした動機は決して万人平等を求めたものではなく、奴隷に対する哀れみからであったと言われる。あれほど熱心に白人の船員や船医たちから情報を得ようとしていたクラークソンが英国在住の元奴隷の証言を利用することはなかった。1780年代には5,000人ほどの黒人がロンドンで暮らしていて、黒人の売春婦が上院に20人の顧客を持っていたと言われる時代であったにもかかわらず、そうであった。¹⁷⁾

1803年、クラークソンは廃止協会に戻った。翌年からクラークソンは再び国中を歩き回った。1807年1月2日にグレンヴィル卿によって、奴隷貿易廃止法案が上院に提出され、3月25日に国王の認可を得た。奴隷貿易の廃止は少なくとも、立法上、実現した。次の課題は奴隷

制の廃止である。クラークソンは奴隷制の廃止に向けた活動を開始した。

奴隷制廃止の活動はさらに強化された。1823年には、ウィルバーフォースとクラークソンに、バクストン (Thomas Fowell Buxton: 1786-04-01~1845-02-19) たちを加えて、反奴隷制協会 (Anti-Slavery Society: the Society for the Mitigation and Gradual Abolition of Slavery throughout the British Dominions) が設立され、クラークソンとウィルバーフォースがその副理事長になった。年齢的にクラークソンは大きな働きはできなかったが、バクストン議員を中心として、1833年8月に奴隷制廃止法 (the Abolition of Slavery Act) が通過した。西インド諸島の80万人の奴隷が解放され、その所有者に総額2千万ポンドの保証金が支払われた。中産階級の年収がせいぜい数百ポンドの時代である。奴隷の所有という、現在から見ると、そして、当時の奴隷制反対論者にとってもそうであったように、犯罪行為をやめるために、10万人ほどの中産階級が1年間暮らせるのと同じ保証金が与えられた。

所有権を手放すことで、プランターは大損したのであろうか。結果としては、まずは徒弟という形式で元の奴隷を雇ったのであって、ほとんど経済的な利益は変わらなかったというべきかもしれない。特定の事業を放棄するのであれば、多くの変化が期待できるが、形式をかえて、継続していたので、徐々に変化したにすぎないであろう。その変化の保証金は莫大なものであった。被害者は踏んだり蹴ったりである。黒人奴隷は解放されても、慰謝料は得られなかった。共同体主義的主張を繰り返している、現代日本の家庭内暴力やイジメも構図としてはこれと大差ない。

大声で怒鳴って、自分の利益を維持したい集団にとっては、まさに犯罪者的なたかり行為は

17) *Ibid*, pp.133-134, 143-144.

止められない。たかり（その一例が奴隷制）を倫理や道徳で正当化できる説明がたいてい用意されている。奴隷貿易と奴隷制に反対した人たちと同様に、現代でも、平和を求める組織はそのような暴力的集団と死闘を繰り返してをえなない。

クラークソンは晩年、白内障で視力を失ったこともあったが、1836年、手術で視力を回復した。彼は1839年には、英国内外反奴隷制協会（the British and Foreign Anti-Slavery Society）の創設者の一人にもなり、世界中での奴隷制の廃止を目指すようになった。1840年6月にフリーメーソンの集会所で、反奴隷制集會が開催されたとき、クラークソンは議長をつとめたが、これが公式の場の最後の仕事になった。クラークソンはサフォークのイプスウィッチで、1846年9月26日、永眠した。

参考文献

大沼保昭『人権、国家、文明: 普遍主義的人権観から文
際的人権観へ』筑摩書房、1998年。
Ian Baucom, “Specters of the Atlantic : finance capi-
tal, slavery, and the philosophy of history”,

Duke Univ. P., (2005).

Anthony Benezet, “Some Historical Account of
Guinea : its situation, produce, and the general
disposition of its inhabitants with an inquiry
into the rise and progress of the slave trade its
nature, and lamentable effects”, Frank Cass,
(1968 ; 1st ed., 1771).

Vincent Carretta (ed.), “Unchained Voices : An
Anthology of Black Authors in the English-
speaking World of the 18th Century”, Univer-
sity Press of Kentucky, (2004 ; 1st ed., 1996).

David Dabydeen, J. Gilmore, C. Jones (eds.), “The
Oxford Companion to Black British History”,
Oxford U. Pr., (2007).

Olaudah Equiano (Vincent Carretta ed.), “The Inter-
esting Narrative and Other Writings”, Penguin
Books, (2003).

James A. Rawley with Stephen D. Behrendt, “The
Transatlantic Slave Trade : A History”, revised
edition, University of Nebraska Press, (2005 ; 1
st ed., 1981).

Unius Rodriguez (ed.), “Encyclopedia of Emancipa-
tion and Abolition in the Transatlantic
World”, 1-3vols., Sharpe Reference, (2007).

James Walvin, “England, Slaves and Freedom, 1776
-1838”, Macmillan Press, (1986).

Steven M Wise, “Though the Heavens May Fall : The
Landmark Trial That Led to the End of
Slavery”, Century, (2005).